

プリズム

柿のある風景

日本の秋と柿

人口約十万人の鶴岡市（山形県）と約十七万人の弘前市（青森県）に暮らす二十歳以上の人それぞれ五百人ずつを選挙人名簿から無作為に抽出して、次のような質問をした。

「あなたの好きな果物を三つまであげてください」「秋を感じさせる果物は何ですか」「あなたは柿の実をみると何を感じますか」。郵送によるアンケート調査に、両市とも約四〇%にあたる人から回答が寄せられた。

「好きな果物」の一位は、鶴岡がりんご、梨、柿の順で、弘前がりんご、柿、ぶどうの順であった。柿は両市とも五十歳代以上の人により好まれる傾向があった。

「秋を感じさせる果物」の一位は柿で、両市とも約四〇%の人が柿と答えた。二位は鶴岡が梨、弘前はりんごであった。柿と答えた人の割合は両市とも年代に関係なかったが、鶴岡で梨と答えた人はどちらかといえば若い年代の人が多く、弘前でりんごと答えた人はやや年輩の人が多かった。

柿に対するイメージは「秋を実感する」と答えた人が九〇%前後で、他を大きく引き離していた。ついで、「食べたいと思う」「懐かしさを感じる」の順。これらの回答は、両市で、しかも二十歳代の人でも七十歳以上の人でもまったく同じ傾向であった。

平 智

「庄内柿」の産地である鶴岡でも、日本有数のりんご産地である弘前でも、やはり日本の秋の果物といえば「柿」であるらしい。二十世紀を迎えようとする現在も、柿の実を見て秋を実感するのは、老若を問わず日本人共通の感覚なのだろうか。

世代を越えて

もつと若い世代はどうだろうか。庄内地域の小中学生と高校生にもたずねてみた。

「好きな果物は小中高をまとめると、梨さくらんぼ、りんご、みかん、桃の順。柿は十番目であった。

にもかかわらず、「秋を感じさせる果物」はやはり柿が一位。続いて梨、りんご。柿に対するイメージも二十歳以上の人にはおよばないものの、「秋を実感する」が多かった。しかし、「食べたいと思う」の次に「特に何も思わない」との回答も少なくなかった。

飽食の時代、多様化した食生活の中で、若い世代の人たちにとっても、柿はまだ「日本の秋」を演出する果物としての地位をかりうじて保っているようである。

ガーデニングブームの陰で

柿は私たち日本人にとって、他にあまり類をみないほど高度な多面的利用植物である。



「さるかに合戦」などの民話にも登場する。日本人と柿のつきあいはすこぶる長いし、とても深い。いや、深かったのである。

今回紹介したアンケート調査の結果から、も、「干し柿」以外の利用については、世代にかかわらず認識度がかなり低くなってきていることが明らかであった。

最近、ガーデニングがブームである。「緑への回帰」は、自然ばなれが過ぎた現代人の、それこそ自然な感情の発露のように思える。しかし、私たちは身のまわりにある多種多様な植物と関わりたいどのようなかわりを持っているのであろうか。

新たに整備された公園や緑地、新築の家の庭、室内におく観葉植物にいたるまで、緑色をした単なる装飾品になってしまっている場合も多いのではないだろうか。

そつと観賞することで感じる美しさや安らぎももちろん重要であるが、対象となる植物に積極的にかかわり、ときにはそれらを利用することで味わえる充実感もまた大切ではないだろうか。奥行きのある深さや幅の広さも、人と植物のつきあいの豊かさの尺度であることを忘れてはならない。

私たちの遺伝子が柿との長くて深いつきあいを忘れてしまわないように……。

（山形大学農学部助教・鶴岡市）